

現代日本における文通に関する一考察

桑畑 洋一郎

要 旨

本研究は、匿名での文通相手募集を仲介するサイト「文通村」における文通相手募集文の計量テキスト分析を通して、現代日本において文通がどのような機能を有しているのか考察するものである。

結果、第1に、文通相手を募集する人々の中にも趣味による細分化が存在し、各趣味はある程度相互排他的に存在すること、第2に、従来手紙の機能として指摘されてきたものが「文通村」の利用者においても重視されていること、第3に、「文通村」の利用者は、文通相手を募集する際に相手の性を意識する傾向があり、しかもそれが募集する側のジェンダーに規定されていることも見えてきた。この第3の点は、従来の研究においては指摘されなかった点であり、本研究で新たに得られた知見であると言えよう。

従来文通は、少なくとも表向きは、異性との出会いを提供するツールとしての役割はそれほど大きいものではなく、むしろ性を含めた属性を不問として多様な相手とやり取りをすることを目的とするツールであった。一方現代的な文通は——少なくとも特に「文通村」の男性利用者においては——、異性とのマッチングツールの機能を帯びるに至っている。

1 はじめに

1.1 研究の目的

本研究は、匿名での文通相手募集を仲介するサイト「文通村」における文通相手募集文の分析を通して、現代日本において文通がどのような機能を有しているのか考察するものである。

文通も含めた、手紙によるコミュニケーションが衰退してきて久しい。2000年以降に限定しても、「家計調査」を元に、郵便料の1世帯当たり年間支出金額を確認すると以下のような推移をたどっている。

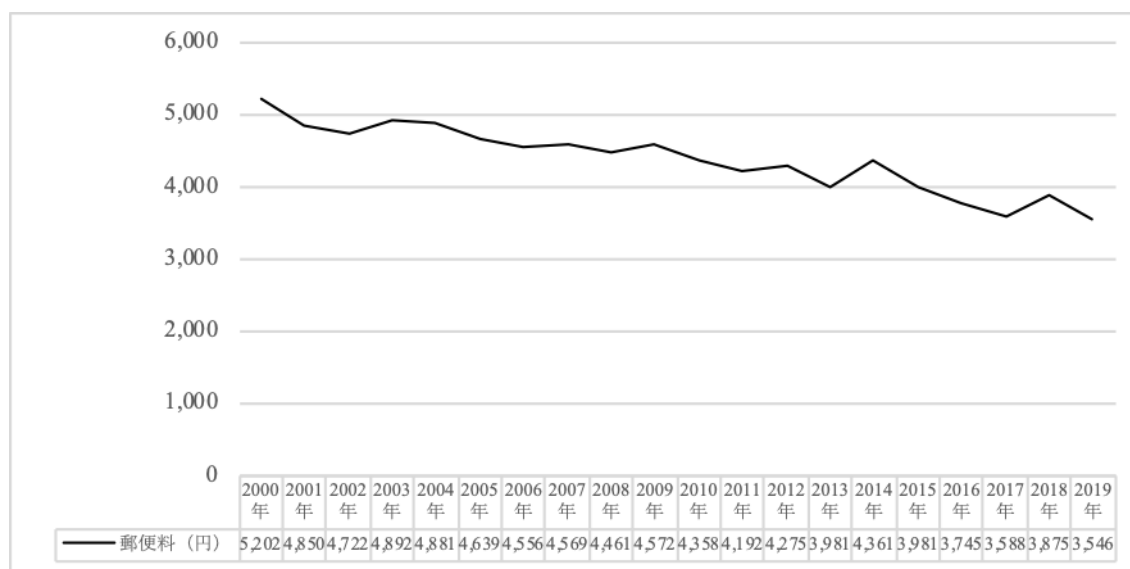


図1 郵便料の1世帯当たり年間支出額（円）の推移
（「家計調査（家計収支編 総世帯 年報）」を元に筆者が作成）

こうした中一方で、新たな形の文通サービスが生まれ、注目を集めている。詳細は後述するが、それが本研究で注目する「文通村」である。「文通村」は、インターネットを通じて文通相手を募集することができ、かつ、匿名性を保ったまま文通を行うことが可能なサービスである。したがって、コミュニケーションを媒介するツールそのものは手紙であるが、コミュニケーションを取っている相手の実体的な理解をすることは、それ自体としては不必要で不可能なサービスとなっている。「文通村」はこうした特異な形式が注目を集め、「朝日新聞」（2011年2月26日付朝刊）や「読売新聞」（2018年4月10日付朝刊、2019年1月8日付朝刊）でも取り上げられた。

以上のように、手紙、ことに文通というコミュニケーションは総体として衰退しつつある一方で、従来とは異なる形式の文通という新たなコミュニケーションが発生しつつあるのが現代の日本社会の状況であると言える。つまりは、コミュニケーション様式に何かしらの変容が生じつつあり、それが従来とは異なる形式の文通という形で表面化している状況に現代日本社会はある。このことに鑑みれば、従来とは異なる現代的な文通の意味を考察することは、現代日本社会の実態を分析し理解する上で重要なこととなる。

人が他人に対して何かを発信することは、他の様々な社会的営為と同様に、その当時の社会によって大きく規定されるものである。文通とは異なるが、新聞に寄せられた身上相談の分析から、日本社会における不幸を類型化した見田宗介の卓越した研究（見田 2012）もそのことを示している。人が他人に対して何かを発信する際、発信内容を通して社会を照射することは可能であるし、そのことは社会学的な意義を持つ。それは文通という行為に関しても同様だろう。

しかしながら、「文通村」のような従来とは異なる現代的な文通に限らず、文通というものの自体についての社会学的研究はほとんどない。もちろん、文通を教育に導入することの可能性を論じた研究（例えば（松本 2015）（加藤・土田 2018）など）や、歴史的な著名人同士の文通を通して当時の時代状況を明らかにしようとした論考（例えば（山田 2013）（甚野 2018）など）、あるいは、雑誌における読者投稿欄——その中に文通相手の募集も含まれる——への分析を通して読者意識の形成を追った論考（田中 2016）といったものはある。また、特に過去の手紙が有していた意味についても、史的研究がいくつか公刊されている（例えば（小松 1976）（柘植 1995）（小林 2002）など）。

しかしながらこれらは、文通そのものに注目する必然性がある研究というよりは、より大きな文脈——例えば教育方法の開発や歴史叙述、メディア史の記述といった——の中で偶然的に文通が注目された研究である。また、文通も含めた手紙そのものに注目がされる場合も、過去の文通・手紙に注目がなされてきた。現代日本における文通というコミュニケーション様式そのものを把握しようとした研究はほとんど蓄積されていない。

こうした中、唯一例外的に、文通も含めて手紙に注目し、現代における手紙の機能と価値を実証的に把握しようとした、宮田穰の著作（宮田 2019）が近年出版された。本書は、「インターネットが日常化するにしたがって、コミュニケーションは表層的で形ばかりのものが多くなりました」（宮田 2019: 5）とする著者の問題意識の元、「ネット社会の今だからこそ、手紙について改めて深く考えてみたい」（宮田 2019: 7）として、手紙にまつわるネット調査や、手紙コンクールの応募作品の内容分析、本研究で注目する文通村も含めた文通サービスのサービス提供者へのインタビュー調査等を組み合わせ、手紙の機能と価値を考察する、卓越した研究となっている。宮田によると、手紙の機能は、手書き文字やそれが切手・便箋等と組み合わせることによって発揮される「表現性」、¹「表現性」が元になって届ける側と届けられる側との関係を築いていく「関係性」、唯一無二のものであるがゆえに捨てられず保管されることによって発揮される「保管性」、読み書きに手間がかかることによって発揮さ

れる「時間性」の4点があるとされる（宮田 2019: 166-175）。また、手紙が届ける側の分身的な位置づけと見なされる「分身化」、手書き文字が醸し出す「心の会話」、手紙を書くことややり取りすることが元で生じる「習慣化」といった3つの価値があるとも宮田は指摘する（宮田 2019: 175-183）。その上で宮田は、手紙は「善意のコミュニケーション」（宮田 2019: 183）「心のサプリ」（宮田 2019: 192）であると指摘し、上述したような「表層的で形ばかり」のコミュニケーションが増えた現在だからこそ、ネット等でのコミュニケーションと手紙とを併用していく「二刀流のコミュニケーション」（宮田 2019: 237）が必要であると指摘した。

宮田の著作は類書がない点でも、また、データを元に手紙の機能と価値を析出している点でも卓越した書籍である。しかしながら、文通サービスの調査において主にサービス提供者に対する調査を行っている点で、どうしても公式な機能が表面化しているきらいがある。また、宮田が最後に示しているような、現代日本社会におけるコミュニケーションがどのようなものであり、今後どうあるべきかといった価値判断についても、特にネットでのコミュニケーションに対する評価が何に基づいているのか判然としないため賛同できない点はある。

こうした点をふまえて本研究では、文通サービスである「文通村」を利用している人々の意識を実証的に把握することを通して、提供者側が——少なくとも公式発表的な意味では——意図していない現代日本における文通の機能を、価値中立的に把握することを目的としたい。またその際、宮田が析出した4つの機能を分析枠組みとして援用しながら考察を進めることとする。

1.2 文通村とは

本研究で分析対象とする「文通村」について概説したい。

「文通村」とは、先述の通り匿名での文通相手を募集する仲介を行うインターネット上のサービスである。2009年に保科直樹が開始したものであり、「総会員数は2000名を超え、年間に行き交う手紙の総数も12万通を超える状況」（株式会社文通村 2020a）となっているとのことである。

サービス内容に関わる規約の条項を引用すると以下のようになる。

第1条（サービスの目的、会員登録）

1. 「文通村～ふみびとの絆～」(以下、運営者といいます) はつながりを大切にしたいミドルからシニアの方々へ文通を通して、誰か「つながる場」と「つながる時間」を提供し、人と人との絆を深めていくことを目的としたサービス(以下、本サービスといいます)を会員に提供します。

2. 本サービスは、各会員に仮想の文通村住所(以下、会員番号といいます)を与え、その仮想の住所で他の会員と文通を行う安全安心を追求したサービスです。運営者は会員の個人情報をおの他の会員には一切公開しません。

3. 会員とは、本利用規約に同意のうえ、所定の方法により会員登録をした方をいいます。会員は本利用規約を遵守のうえ、本サービスを利用するものとします。

4. 会員登録は、会費を支払うことによって完了となります。

5. 一度支払われた会費は返金できません。(株式会社文通村 2009a)

すなわち、繰り返しになるが、文通を希望する人々——それも主に「ミドルからシニア」——対象に、「仮想の(中略)住所」を付与することで、匿名での文通を可能とするサービスである。また、会費制となっている。ちなみに会費は、「3か月お試しコース」で2,310円、「6か月お試しコース」で4,620

円、「3か月コース」で3,200円、「6か月コース」で5,280円、「12か月コース」で9,000円となっている。この内「6か月コース」と「12か月コース」には、手紙のやり取りが一切なかった場合を条件に返金制度も設けられている（株式会社文通村 2009b）。

会員に対するサービス停止措置が取られる事項や禁止事項としては、

第4条（会員に対するサービスの停止・会員取消）

運営者は、特定の会員が次の各号に該当すると判断した場合には、事前に通知することなく、当該会員によるサービスの利用停止、または当該会員の会員資格の取消しを行うことができるものとします。これにより会員に何らかの損害が生じたとしても、運営者は一切責任を負わないものとします。

- 1号 会員登録の際の記入事項に虚偽があることが判明した場合
- 2号 本サービスによって提供された情報を不正に使用した場合
- 3号 運営者が、当該会員が本サービスないし他の会員に損害を与える危険があると判断した場合
- 4号 その他、運営者が、本サービスの利用について不相当と判断する場合

第7条（禁止事項）

会員は、本サービスを利用するにあたり、以下に該当する行為を禁止します。

- 1.他の会員を不快にさせるような迷惑行為
- 2.公序良俗に反するもの
- 3.法令に反する行為
- 4.本サービスの運営を妨げ、または、運営者の信用を毀損する行為
- 5.営利、非営利を問わず、すべての販売や勧誘等の行為
- 6.その他、運営者が不相当と判断する行為（株式会社文通村 2009a）

といった条項が設けられている。したがって、「文通村」は、匿名での文通を仲介するサービスではあるのだが、永続的な匿名でのやり取りを強制するものではなく、すなわち文通を繰り返す内に実名でのやり取りを行うこと自体は——文通でやり取りしている双方が同意すれば——推奨されてはいないが制限もされていないように読める。

「文通村」が2020年に実施した会員調査（回収数702件で回収率40.9%、有効回答数は696件）⁽¹⁾によると、性別は女性が92.7%で男性が7.3%、年代は20代以下が15.7%、30代32.8%、40代23.7%、50代17.8%、60代8.9%、70代以上1.1%となっている（株式会社文通村 2020b）。したがって、先に引用した「ミドルからシニア」といわれる世代よりもやや低めの世代が利用しているサービスのようと思われる。

前節で参照した宮田穰が社長の保科に対して行ったインタビューによると、女性会員が多い理由は女性が「小中学生のころから手紙に慣れ親しんでいるから」であり、また、女性の中でも、「SNSが好きか嫌いかで分かれ」、「[インスタグラム等で“盛る”ことが:引用者注]あまり好きではない女性にとって自分を表現する場があまりない」ために、「そのような人たちが深いかかわりをどこかで求めているのではないか」（宮田 2019: 139-140）と認識しているとのことである。

1.3 本研究で分析対象とするデータについて

さて、本研究では、前節で見てきた「文通村」の会報（月2回発行、最新の2020年11月30日号で第264号）である『会報ふみびと』⁽²⁾内の「文通村掲示板」を分析対象とする。具体的には、2019年1月15日号から2020年10月15日号までの41号分を対象とする。この「文通村掲示板」は、新規入会者から他の会員に対して文通を求めるメッセージが記載されたものであり、毎号概ね50名ほどの情報とメッセージが記載されている。

すなわち、新入会員の個々の自己紹介と、文通相手に求める要素、文通そのものに求める要素といったことがこの掲示板には記載されており、「文通村」を利用している人々の意識を実証的に把握するという本研究の目的を達成する上で適格的であると思われるからである。

なお、分析に際しては計量テキスト分析ソフトKHCoderを使用することも合わせてここで述べておきたい。KHCoderとは、樋口耕一が開発した計量テキスト分析支援ソフトである。ソフトを用いた計量テキスト分析には、まず何より膨大なデータの分析を容易にする点があり、また、分析手続きを明確化することによる検証可能性の担保を後押しする利点がある。さらに加えて、データの潜在的構造を探索できる利点もある（樋口 2020: 12-16）。なお本来であれば、計量テキスト分析を行った上で、元のテキストデータに立ち戻っての質的分析と組み合わせることも重要となると思われるが、本研究では紙幅の都合から計量テキスト分析を主に行うこととしたい。

2 結果

2.1 基礎統計と単純集計

KHCoderで分析を行ったところ、総抽出語数は232,404語、異なり語数は10,404語であった。

まず全体の集計を見てみると、頻出20語と出現回数は以下の通りであった。

表1 頻出20語と出現回数（全体）

語	回数	語	回数	語	回数	語	回数
文通	1,811	手紙	1,228	お話	709	大好き	518
思う	1,720	趣味	981	嬉しい	683	巡る	460
お願い	1,513	鑑賞	977	音楽	681	楽しい	435
好き	1,507	映画	837	はじめまして	645	ゲーム	424
読書	1,256	書く	836	旅行	642	話	412

文通相手を募集する文面であるため、「文通」や「手紙」が上位にきており、また、自己紹介のために趣味を示すような「読書」「趣味」「鑑賞」「映画」「音楽」といった語も上位にきている。

2.2 語の共起とコーディングによる分析

続いて、用いられ方が類似する語同士をネットワーク図で描く共起ネットワークを用いて分析を行ってみたい。結果は以下の通りである。

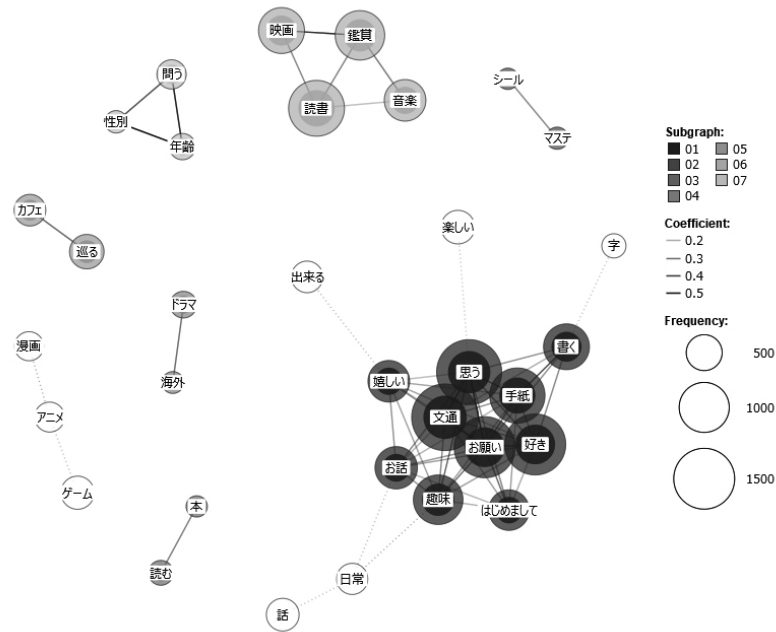


図2 共起ネットワーク（全体）

共起ネットワーク図では、用いられ方が類似する語が直線で結びつけられ、言うならば後の仲間同士がグルーピングされて図示されることとなる。上図を見ると、右下にあるグループから、挨拶文・呼び掛け文で用いられがちな語群の存在がまず見て取れる。これは文通相手の募集といった趣旨からはある意味当然のことであると考えられよう。

また他には、「映画」「鑑賞」「読書」「音楽」といった趣味語の組み合わせと、「マステ」「シール」といった趣味語の組み合わせ、また、線が薄くてやや見づらいが「漫画」「アニメ」「ゲーム」といった趣味語の組み合わせからなるグループが存在していることが分かる。このことからまず、文通相手を募集する人々の中にも趣味による細分化が存在し、各趣味はある程度相互排他的に——映画と読書と音楽は近いグループであるが、マスキングテープやシール集めとは接続しないといったような——存在することがうかがえる。

さらに、「問う」「年齢」「性別」のグループからは、文通相手に特定の条件を求める／求めないことが表明される場合には主に性と年齢が重視されることが見て取れよう。

さて続いては、同様の語同士をグルーピング（コーディング）し、各グループの語がどのように出現しているのかを見てみることにしたい。なお、コーディングルールは以下の通りである。カギ括弧内にコード名が、隣の列に各コードに含まれる語が示されている。なお、コーディングに際しては、実際に元の募集文に立ち戻り、おおよそ同様の用いられ方をしている語が各コードに含まれるようにしている。

表2 コーディングルール

コード名	コードに含まれる語
「男性」	男性／男
「女性」	女性／女
「一般的属性」	年齢／性別／職業／年代／世代
「結婚状況」	既婚／結婚／独身
「配偶者・パートナー」	妻／嫁／夫／主人／旦那／連れ／ツレ／つれ／パートナー／相方／配偶者／恋人／彼女／彼氏
「恋愛」	恋愛／愛情／恋
「負の感情」	淋しい／さびしい／寂しい／冷たい／悲しい／疲れ／忙しい／忙しく
「正の感情」	楽しい／あたたかい／温かい／暖かい／あったかい／嬉しい／好き／大好き／ほっこり／やさしい／優しい
「SNS・ネット」	SNS／ネット／スマホ／インターネット／IT
「新しい」	新しい／最近／現代／近年／今／現在
「古い」	古い／過去／昔／懐かしい／懐かしく
「おそい」	ゆっくり／のんびり／おそい／遅い／スロー／ゆったり／マイペース／穏やか／ゆるい／緩い／ゆるく／まったり／じっくり
「はやい」	はやい／速い／早い／スピード／ファースト／ファスト／あわただしい／慌ただしい
「諸困難」	離婚／失業／失職／クビ／バツ／ひきこもり／引きこもり／不登校／無職／苦勞／悩み／病／病氣／障害／症／ADHD／PTSD／HPS／マイノリティ／療養／治療／介護／シングルマザー／シングル／亡／逝／看取る／看取って／犯罪／被害／リハビリ
「セクシュアリティ」	ゲイ／レズビアン／同性愛／LGBT
「縁」	つながる／つながり／縁／出会い／出会う
「共感」	共感／共有／共通
「趣味」	趣味／興味／関心
「書くこと」	文章力／語彙／誤字／脱字／文字／字／書く／表現力／習字／筆
「限定」	限定／限る
「不問」	問う／不問

さて、以上のコーディングを元に集計を行った結果が以下の図の通りである。なお、1つの文中に複数のコードが同時に含まれていることもあること、また、どのコードも含まれていない文章が70.3%あったことには留意が必要である。

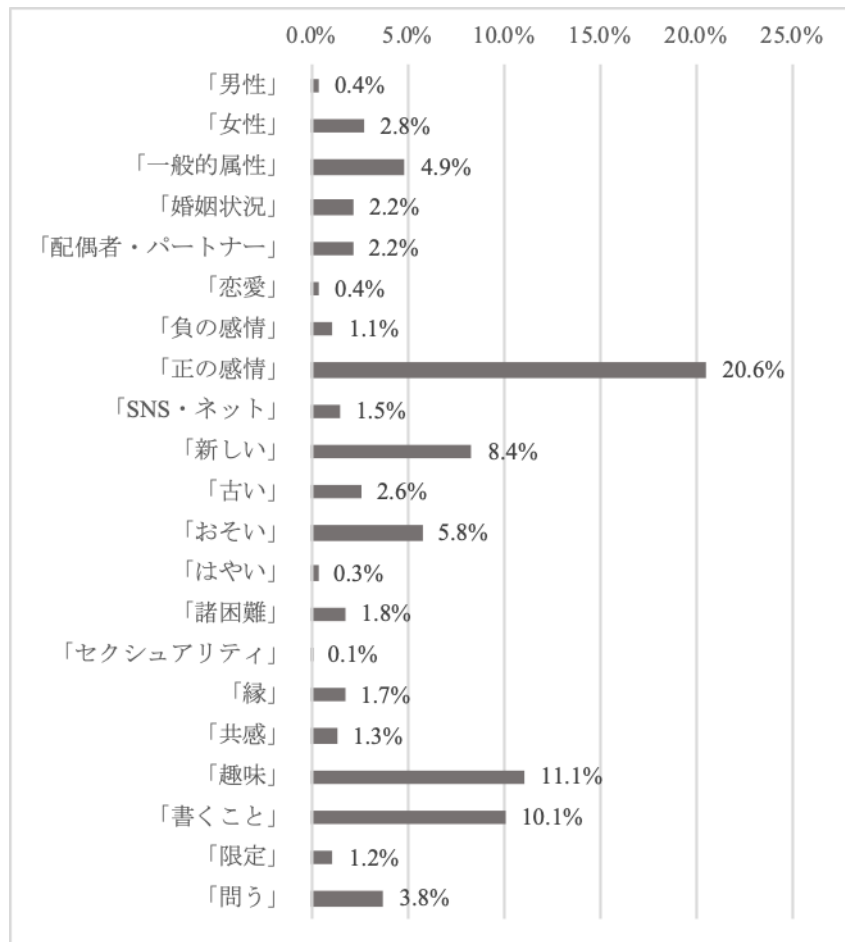


図3 コードごとの集計

以上を見ると、「正の感情」が含まれている文章が多いことにまず気付く。これは宮田穰が指摘する「関係性」に基づいた「善意のコミュニケーション」機能が手紙に求められていることを反映していることであろう。「縁」や「共感」が一定程度あることもまた同様の意味があると思われる。加えて、「書くこと」に言及する文章が多いのは、これもやはり宮田穰が指摘する、手書きの文字による「表現性」の機能を反映していることであろう。また、「おそい」と「はやい」あるいは「SNS・ネット」も含めたコードがそれぞれ一定程度出現しているのは、宮田穰の指摘にある「時間性」の価値と関係していることだと考えられる。実際に、これらのコードが用いられている文章を見てみるとそのことはより分かりやすくなる。以下に2つ引用する募集文は典型的であろう。

SNS [「SNS・ネット」コードに該当:引用者注] のように早い [「はやい」コードに該当:引用者注] レスポンスではなく、ゆるく [「おそい」コードに該当:引用者注] 丁寧なつながりが持ちたいなど思い登録しました。紙ものが好きなので、今まで使うあてのなかったハガキや封筒、便せんなどを使って手紙をいそいそ、ウキウキ書きたいです。いろいろなものに興味を持つタイプなので、趣味が一緒のひととも、そうでないひととも、のんびり [「おそい」コードに該当:引用者注] やりとりできればなと思っています。(2020年6月15日、第253号に掲載)

のんびり [「おそい」コードに該当：引用者注] としての性格で、日常会話ですらペースが早く [「はやい」コードに該当：引用者注] 感じ、思いが伝わらないことにヤキモキしています。じっくり [「おそい」コードに該当：引用者注] と大事に言葉を紡げる手紙で、お話しできる方を増やせたらいいな、と思っています。(2019年3月15日、第224号に掲載)

つまりは、SNS等に代表されるような、現代社会の時間の流れの速さに対してやや負担を感じており、そうした速さへのオルタナティブとして遅いコミュニケーションである文通を求めた、という認識がここからは見て取れる。

以上のように、全体的な分析からは、宮田が指摘したことを裏付けるような結果が見えてきた。「文通村」を利用している人々においても、宮田が指摘したような文通の機能が重視されていることが見て取れる。

しかし一方で、図3の結果からも既に、宮田の指摘とは齟齬があるような事態も見えてくる。たとえば「男性」と「女性」コードの出現比が利用者比と対応していないように見えることに違和感がある。「男性」コードと「女性」コードの出現比は1対7であるが、利用者比については、上述した通り「文通村」が実施したアンケート調査によると性別は男性が7.3%で女性が92.7%と、おおよそ1対12.7である。つまりは、「男性」コードに含まれる語が、実際の利用者数に比して多めに用いられているわけである。これはなぜなのか。つまりはここから、文通というコミュニケーションにおける機能に何かしらのジェンダー規定性が存在することが示唆される。このことを確認するために、次節では、利用者の性別ごとに用いられる語の傾向の違いを見ていくこととしたい。

2.3 利用者の性別による語の使用傾向の比較

この節では、利用者の性別によって用いられる語がどのような傾向を持つのか、比較しながら見ていくこととしたい。

まずは単純に個々の語の用いられ方の違いを見る。利用者が女性の場合と男性の場合では、以下のような特徴語の傾向が見られた。なお数値はJaccard係数であり、1を最大値として、高いほど特徴的に用いられていることを指す。

表3 性別による特徴語

女性		男性	
お願い	.170	思う	.063
好き	.127	読書	.059
手紙	.112	文通	.058
趣味	.097	鑑賞	.050
書く	.083	音楽	.047
嬉しい	.077	映画	.046
お話	.076	人	.038
はじめまして	.074	仕事	.037
旅行	.072	温泉	.032
大好き	.054	万年筆	.030

どちらも趣味に関わる語が多いためここではまだはっきりとした傾向があるとはまでは言い切れないが、男性に「仕事」の語が出ているのは興味深い。

続いて、女性と男性で共起ネットワーク図を描くとどのようなになるか図示してみたい。

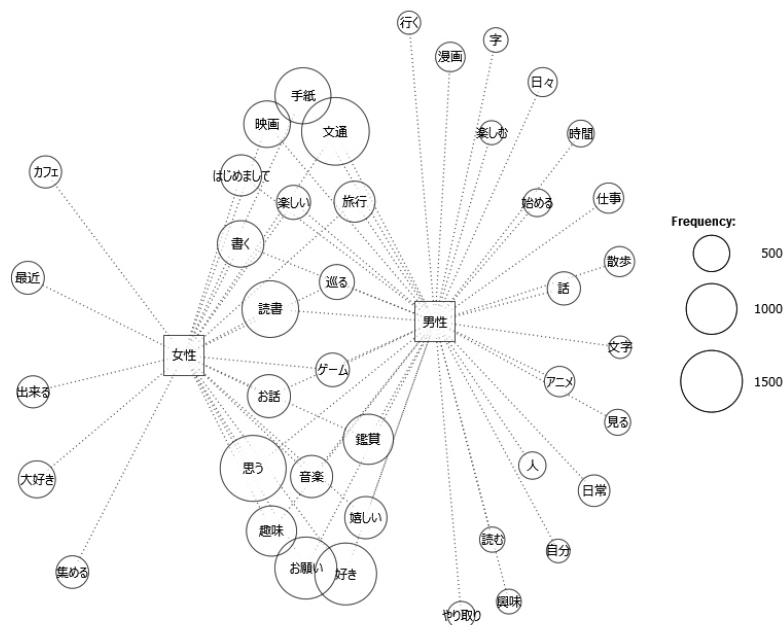


図4 共起ネットワーク（性別）

ここでもやはり趣味に関わる語が多いが、上図からは、文通相手の募集の際に女性が主に表明しがちな趣味（「カフェ」「集める」）と、男性が主に表明しがちな趣味「漫画」「アニメ」「散歩」「読む」があること、両性に共通して表明されがちな趣味（真ん中の固まり）があることが見て取れる。またやはり「仕事」は男性の側に特徴的に登場していることが分かる。

続いて、先に提示したコーディングルールに基づいて性別で分析してみたい。まずはクロス集計の結果である。以下の通りである。なお、表が非常に冗長になるため、全てのコードではなく、カイ二乗検定の結果有意となったコードの結果のみ表として記載した⁽³⁾。

表4 性別による各コードの出現回数

	「男性」	「女性」	「一般的属性」	「配偶者・パートナー」
女性	23 (0.3%)	231 (2.9%)	407 (5.1%)	182 (2.3%)
男性	11 (1.6%)	10 (1.5%)	19 (2.8%)	6 (0.9%)
合計	34 (0.4%)	241 (2.8%)	426 (4.9%)	188 (2.2%)
χ^2	25.637**	3.960*	6.251*	4.923*

	「正の感情」	「SNS・ネット」	「古い」	「おそい」
女性	1,686 (21.0%)	112 (1.4%)	199 (2.5%)	479 (6.0%)
男性	104 (15.5%)	18 (2.7%)	26 (3.9%)	24 (3.6%)
合計	1790 (20.6%)	130 (1.5%)	225 (2.6%)	503 (5.8%)
χ^2	11.342**	6.070*	4.196*	6.130*

	「限定」	「問う」
女性	99 (1.2%)	312 (3.9%)
男性	1 (0.2%)	15 (2.2%)
合計	100 (1.2%)	327 (3.8%)
χ^2	5.508*	4.266*

*p<.05, **p<.01

これを見ると、男性が有意に頻繁に用いているコードは「男性」「SNS・ネット」「古い」の3つであり、女性が有意に頻繁に用いているコードは「女性」「一般的属性」「配偶者・パートナー」「正の感情」「おせい」「限定」「問う」であることが分かる。

本稿ではこれ以降、上記のコードの中でも特に、「男性」「女性」コードとそれに関連するコードに着目し、その用法を通して前節の末尾で示唆された、語の用いられ方のジェンダー規定性を確認していくこととしたい。そのためにまず、男性利用者が「男性」コードを用いている場合を引用する。

文通村の皆様こんにちは、40代の独身男性〔「男性」コードに該当：引用者注〕です。結婚は諦めました。毎日母と二人で生活を楽しんでおります。もちろん喧嘩もします。たまに一緒に外出したりもします。そんな母のもとに生まれてきてよかったと思います。このようなものですが、ご縁があれば宜しくお付き合い申し上げます。文通できたら良いな！（2019年2月15日、第222号）

大学生です。男〔「男性」コードに該当：引用者注〕もすなる文通といふものを、オタクもしてみむとてするなりしたくて入村しました。趣味は読書とオタクお絵描きです。オタク絵送り合うのとかしてみたいです！また英語の学習に興味があります。英語のお手紙を送り合うのとかもしてみたいです！文通を通じて色々な方のお話の聞く（読む？）ことができればと思っています。よろしくお願いします。（2019年7月31日、第233号）

はじめまして。***〔ペンネームのため伏せ字とした：引用者注〕と申します。未婚の独身男性〔「男性」コードに該当：引用者注〕です。普段はWEBデザイナーをしており、在宅にて一人で、フリーランスとして働いています。仕事ばかりに生きてきたため、恋愛もせず、たまに友人と遊びには出かけるものの、ひとりきりで生きてきました。誰かと繋がることで、ホッとできる時間が欲しくなりました。素敵な方とご縁がありますように。（2020年1月15日、第243号）

つまりは、自己紹介の文脈で自分の性別を表明するために用いられているということである。これはもちろん、女性が「女性」を用いる際にも同様の傾向が見られる。

既婚の子なしの40代女性〔「女性」コードに該当：引用者注〕です。友達も居ず仕事場と家の往復の毎日です。ホッくり出来るような手紙でのやり取りが出来たらなあと思っています。（2019年1月15日、第220号）

ここまで見た限りでは当然のこのように思われるかもしれない。しかしながら、実は女性が「女性」を用いる際には、男性にはほぼ見られない⁽⁴⁾もう1つの傾向が見られる。

はじめまして。アラフィフ、田舎在住、最近仕事を始めた主婦です。仕事や家族についての愚痴、自慢話などの日常生活、はたまた昔の懐かしい事について楽しくお話しできたら嬉しいです。趣味や境遇が全然が違っていても良いので、近い年齢の女性〔「女性」コードに該当：引用者注〕との文通を希望しています。人生折り返し地点、お互いのこれからの夢や思い出話などに花を咲かせたいです。よろしくお願いします。（2020年10月15日、第261号）

つまりは、自己紹介ではなく、募集相手として「女性」、即ち同性を求める際にこのコードは用いられる傾向がある。より分かりやすいものが以下のいくつかの投稿であろう。

はじめまして。子供の頃よく文通していて、またやりたくて登録しました。猫と2人暮らしです。趣味や日常の些細な話を、可愛い便箋や季節の便箋を使って文通したいなと思ってます。年齢は問いませんが同性（女性）〔「女性」コードに該当：引用者注〕限定でお願いします。よろしくお願いします！（2020年10月15日、第261号）

初めてまして、***〔ペンネームのため伏せ字とした：引用者注〕です。中1の息子、小4の娘、夫の4人家族です。新しいことを始めたくてお試し入会しました。色々な世界が知りたいので、皆さんの大好きを教えてください。年齢は一切問いませんが、女性〔「女性」コードに該当：引用者注〕限定でよろしくお願い致します。（2019年1月15日、第220号）

ちなみにこのような用法は女性の場合に圧倒的に多く、男性の場合には見られない。むしろ逆に、

自閉症スペクトラム（ASD）で、障害者手帳2級。ややヒキコモリ気味です。一応、売れない作家をしています。（amazon kindleストアで）話すのが苦手なので、手紙で仲間を探そうと思いました。音楽はメタル、アニソン。読書は新書、白樺派。アニメはラブライブサンシャイン。なるべく女性〔「女性」コードに該当：引用者注〕の方と文通したいです（やり取りをする練習がしたいので）（2019年5月16日、第228号）

はじめまして。文通を20年ぶりにしてみようと思いました。独身で、一人暮らしをしながらのんびりと過ごしています。ハンディ（身体・知的）を持っていますが、気にせずに関わって下さると嬉しいです。去年より、学生向けのラジオを聴くうちに、すっかり坂道ファンになってしまいました。地域・年齢は気にしませんが、なるべくなら女性〔「女性」コードに該当：引用者注〕を希望します。よろしくお願いします。（2020年1月31日、第244号）

といったように、男性が「女性」コードを用いるのは異性の文通相手を探す場合である。

では女性も同様に「男性」コードを用いて異性の文通相手を探すことはあるのか。結論から言えば、それは今回のデータに限ってはほぼ⁽⁵⁾見られなかった。女性が「男性」コードを用いるのは、

ご覧いただきありがとうございます!既婚／子供なし／色々な話をしたいと思いはじめてみました。ヴィジュアル系、k-pop、欅坂46がだいすきです。色々な方と文通したいです。申し訳ありませんが男性〔「男性」コードに該当：引用者注〕はごめんなさい。（2019年1月15日、第220号）

既婚女です。小説や絵を書いたり美味しい店を見つけるのが好きなデブなおばさんです（笑）旦那がいるから男性〔「男性」コードに該当：引用者注〕不可。宗教勧誘もお断りしています。文通をするならイラスト交換を試みたいです。でもイラスト交換がなくても趣味が合えば文通したいです。女性であれば年齢は10代～40代までok。聖剣、SO、DQ、どうぶつの森、ジブリ、ルパン三世、雑貨屋や将棋も好きです。（2019年8月31日、第235号）

といった形で男性との文通を拒絶する場合か、あるいは

初めまして！**〔実居住地と思われるため伏せ字とした：引用者注〕県に住んでいる***〔ペンネームのため伏せ字とした：引用者注〕ですよろしくお願ひします！今1歳1ヶ月の子育て中です！女性の方も男性〔「男性」コードに該当：引用者注〕の方も年齢なども気にせずたくさんの方とお話できたら嬉しいです！よろしくお願ひします！（2019年4月27日、第227号）

のように、性別は不問であることを示す場合に用いられている。なおこうしたことが、「限定」コードや「問う」コード、あるいは「性別」という語も含んだ「一般的属性」コードが女性において有意に用いられていることとも関連しているのであろう。

以上のように、本研究における分析からは、文通相手を募集する際のジェンダー規定性が見えてきた。すなわち、男性は女性をやや積極的に文通相手として見なしている一方で賛成に対しては、拒否はしないが積極的に募りもしないといった姿勢で見なしている。他方女性は男性を文通相手としてはほぼ見なしておらず——それどころか拒否傾向すらある——、かつ女性を積極的に募集する傾向がある。これを類型化すると以下ようになる。

表5 文通相手の募集に見るジェンダー規定性

		希望文通相手	
		男性	女性
募集する側	男性	拒否はしない	やや積極的募集
	女性	拒否傾向	積極的募集

以上のように、「文通村」の利用者は、文通相手の募集に際して相手の性を意識していることが明らかとなった。

3 おわりに

最後に、本研究で示された結果を確認し、考察を加えて本稿を閉じることとしたい。

本研究では、「文通村」の会報である『会報ふみびと』内の「文通村掲示板」を分析対象とし、KHCoderを用いて計量テキスト分析を行った。結果、第1に、文通相手を募集する人々の中にも趣味による細分化が存在し、各趣味はある程度相互排他的に存在すること、第2に、宮田穰が手紙の機能として指摘したものの内特に「関係性」「表現性」「時間性」の機能が「文通村」の利用者においても重視されていることが明らかとなった。ここまでは宮田が指摘してきたことをほぼなぞる結果である。ただし一方で、第3に、「文通村」の利用者は、文通相手を募集する際に相手の性を意識する傾向があり、しかもそれが募集する側のジェンダーに規定されていることも見えてきた。この第3の点は、宮田の分析においては指摘されなかった点であり、本研究で新たに得られた知見であると言えよう。

さてそれでは、こうした結果——特に新たな知見である第3の結果——はどのような意味を持つと言えるだろうか。この結果からはまずもって、文通によってコミュニケーションを取ろうとする者のジェンダーによって、宮田が指摘した機能の意味するところに若干差異が存在する可能性が示唆されるだろう。すなわち、「関係性」を求めること自体では男女に差はなくとも、どのような相手とどの

ように「関係性」を築こうとするかという点でジェンダーによる規定性が存在する。より直接的に言うならば、女性は同性と文通をしたがるが男性はそうではないということである。

ではなぜそのようなことが生じるのか。まず第1には、“既にパートナーがいる場合は他の異性と手紙を交わすことも許されるべきではない”という規範が女性に対して強く求められていることが背景にあるからであろう。そのことは、女性利用者によって「あたしは旦那がいるので女性限定でお願いします」（2019年2月15日、第222号）、「旦那がいるから男性不可」（2019年8月31日、第235号）、「彼氏がいるため女性のみでお願いします」（2019年8月31日、第235号）といった表現が用いられていること——その一方で男性利用者はそのような表現を用いていないこと——からも示唆される。また加えて第2に、“異性との恋愛目的での出会いを求めることは許されるべきではない”という規範が、先の規範と同様に女性に対して強く求められていることも推測される。例えばそれは、「出会い目的、SNS等で手紙を公開する方はお断りします。一般常識ある方をお願いします」（2019年9月30日、第237号）、「出会い目的、宗教、その他勧誘はお断りいたします」（2019年10月15日、第238号）、「宗教、出会い系、アダルト系等はお断りです」（2020年4月30日、第250号）といったような表現が用いられていることからうかがえよう。異性との「出会い」を求めるのは、「宗教」への勧誘や「アダルト系」への勧誘と同等の「一般常識」がないこととして忌避されている。なおちなみに、男性はこのように異性との「出会い」を忌避することはなく、むしろ「なるべく女性の方と文通したいです」（2019年5月16日、第228号）、「なるべくなら女性を希望します」（2020年1月31日、第244号）といったように、異性との「出会い」をむしろ積極的に求める傾向すらあるのは先に見た通りである。言うならば、男性は文通を異性のマッチングツールとしても用いている傾向がある——とは言えしかし、女性の側はそうした使い方を忌避するので、マッチングが成就する可能性は低いと思われるが——のである。

既に述べたように、宮田穰は、手紙を「善意のコミュニケーション」（宮田 2019: 183）「心のサプリ」（宮田 2019: 192）であると指摘した。そうした側面があることは確かに否定されるものではなく、実際「文通村」の利用者においてもそうした意味合いを文通に見出していることは事実である。しかし一方で、文通を、異性と出会うためのツールとしても位置付けている利用者が、特に男性において存在することも本研究からは示唆された。1949年に設立され、日本における文通を主に担ってきた団体である「郵便友の会（現在は青少年ペンフレンドクラブ／PFC）」は「国内はもちろん外国にも友だちを求めて、友愛の世界を築こう！」をスローガンに、「平和」「友愛」「教養」の追求を信条として活動を進めてきた（日本郵政グループ 作成年不明）。従来文通は、少なくとも表向きは、異性との出会いを提供するツールとしての役割はそれほど大きいものではなく、むしろ性を含めた属性を不問として多様な相手とやり取りをすることを目的とするツールであった。まさしく宮田穰の言う「善意のコミュニケーション」を担うツールとなることが文通のそもそもの目的であったのである。

しかし現代的な文通は——少なくとも「文通村」の特に男性利用者側においては——、異性とのマッチングツールの機能を帯びるに至っている。その是非について本研究が問うことはしないが、このような、現代日本における文通の意味合いを新たに見出したことに、本研究の意義はあるだろう。

一方で本研究には課題も残る。第1には、文通の意味のジェンダー規定性に本研究は注目したものであるために、その他の意味についての考察がほとんど行えていない点である。本研究では全く言及できていないが、「文通村」の利用者募集文を見ていると、利用者が自身の病や障害等の困難や自身のセクシュアリティを開示した上で文通相手を募集することがしばしばある。そうしたことを分析・考察することを目的として「諸困難」「セクシュアリティ」コードも作成したのだが、分析の俎上に載せることができなかった。この点については稿を改めて再考することとしたい。また第2に、本研

究は文通相手募集文の分析を行ったものであり、実際に利用者に対する調査等を行ったものではないという点にも課題は残るだろう。募集文はその性質上、建前的なものが前面に出やすく、実際の利用傾向そのものはまた異なる可能性がある。これについても今後の課題としたい。

謝辞

「文通村」の存在については、山口大学人文学部の原さく乃さんからご教示をいただいた。本研究は原さんが「文通村」を教えてくれたことにより成立したとっていい。この場を借りてお礼を申し上げたい。なお言うまでもないが、本研究についての責任は筆者のみにある。

注

- (1) 回収率は記載されているものの、配布数については記されていないため判然としない。また、回収数と回収率から判断するに、半端な配布数なのではないかと思われるが、なぜその数にしたのか、サンプリングをどのように行ったのかということも分からない。
- (2) 「文通村」サイト内の「ギャラリー」のページ (<https://www.fumibito.com/gallery.html>) にバックナンバーが掲載されている。
- (3) なお、女性8,030件男性673件の総数8,703件である。これは募集文の段落でカウントしているものなので、人数とは異なる。また、このクロス表は、各コードを個別にカイ二乗検定したものが複数連なって表となっていることにも注意されたい。カイ二乗値は各コード個別の検定から算出されたものである。
- (4) 男性の相手を積極的に募集している男性の文章としては、唯一以下のものしかない。
歳をとりました。10代から20代の若い元気な若い男性〔「男性」コードに該当：引用者注〕との交流を望みます。在りし日の自分を思い出したい。連れ合いは他界して時が過ぎ、忌憚なく話をしたりできる若い相手に出会って見たい。そのような相手が存在するだろうか？（2020年8月31日、第258号）
- (5) 男性を積極的に募集する女性の文章としては、以下のものが唯一である。
初めまして2児のママしてます***〔ペンネームのため伏せ字とした：引用者注〕です☆仕事はベッドメイクをしています!!インスタグラムのタグで此処を見つけたのがきっかけです☆最近、紙モノにはまり作った物を交換したりして楽しんでます.同じ様な趣味の方やそうでない方でも、楽しく文通出来たらいいなと思います(^-^)よろしくお願ひします☆男性〔「男性」コードに該当：引用者注〕とも文通してみたいです!!（2019年9月30日、第237号）
とは言えこれも「男性とも」（強調は筆者）なので、積極的に男性のみを募集しているわけではない。

文献

- 甚野尚志，2018，「朝河貫一とグレッチェン・ウォレン（Gretchen Warren）の文通——イェール大学バイネッケ図書館所蔵「朝河発グレッチェン宛書簡集」について」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』6: 403-421.
- 株式会社文通村，2009a，「〈文通村〉会員規約」（2020年12月9日最終閲覧：https://www.fumibito.com/img/user_policy.pdf）.
- ，2009b，「ご利用料金」（2020年12月9日最終閲覧：<https://www.fumibito.com/rate.html>）.
- ，2020a，「総会員数2000名を超え、年間に行きかう手紙数12万通。」（2020年12月9日最終閲覧：<https://bit.ly/36YBPez>）. ※なお、URLに2バイト文字が含まれており非常に冗長だったため短縮URLを生成して記載している。
- ，2020b，「文通村に関する会員調査（単純集計結果）2020年2月実施」（2020年12月9日最終閲覧：<https://bit.ly/3oxAxy>）. ※これについてもURLが非常に冗長だったため短縮URLを生成した。
- 加藤隆弘・土田友信，2018，「海外の生徒との文通による英語学習への意識変化について」『教育実践研究』44:33-41.
- 小林正義，2002，『みんなの郵便文化史——近代日本を育てた情報伝達システム』にじゅうに。

小松茂美, 1976, 『手紙の歴史』 岩波書店.

松本英一, 2015, 「対話的コミュニケーションで思考・判断・表現力を育てる——『どうぶつの赤ちやん』になりきって文通しよう」(第1学年)の場合」『国語教育探究』28:124-131.

見田宗介, 2012, 「現代における不幸の諸類型」『定本見田宗介著作集V——現代化日本の精神構造』 岩波書店, 1-73.

宮田穰, 2019, 『ネット時代の手紙学』 北樹出版.

日本郵政グループ, 作成年不明, 「PFCの誕生」(2020年12月17日最終閲覧: <https://www.pfc.post.japanpost.jp/birth/index.html>).

田中卓也, 2016, 「1980年代『平凡』における読者意識の形成と若者文化——『たのきん(トリオ)』に熱狂する読者等と廃刊をめぐる」『共栄大学研究論集』14:167-191.

柘植久慶, 1995, 『軍事郵便物語』 中央公論社.

山田雄三, 2013, 「〈研究ノート〉文通するニューレフトたち——1980年代の核兵器・核エネルギー問題をめぐって」『ポストコロニアル・フォーメーションズ』(8):37-41.